

1 四十九日えっち。アフターSS『さよなら、私』

2

3
+++++

4

5 死。それは人間である限り誰にでも訪れる、大切な人との離別。病氣や寿命に

6 よる死のように、残される者たちに別れを告げる時間がある場合もあれば――

7

不慮の事故や事件などに巻き込まれ、唐突に生命の灯火を吹き消されてしま
8 う場合もある。

9

どちらの方が良いなどと単純化できる問題ではない。覚悟ができていようと
10 できてまいと、死んでしまえばもう二度と姿を見ることがも触れることも……

11

ただいまを言ってあげることができないのだから。

12

そんな別れを経験し、心に大きな傷を負った女性がここにも一人。

13

自宅の縁側に腰かけ、手入れが行き届いていないのか雑然とした印象の庭を

14

眺めながら、彼女は深く暗い息を吐いた。

15

「……かすか幽」

16

彼女の名は四十九日よとぐにかすみ香澄。不慮の事故によりまだ十歳だった娘を亡くした、悲

17

劇の母だ。元々母子家庭だったため、今は一人で広い家を持て余している。

18

五十代に差し掛かったばかりの彼女だが、髪はボサボサの白髪交じり、肌ツヤ

1 も同年代と比べてとても悪い。

2 言い方は悪いが、老衰間近の病人のような風貌だ。

3 美人と呼んで差し支えない程整った顔貌にも関わらず、ここまで荒んでしま

4 っているのはやはり。

5 「……会いたい。もう一回だけでいいから。せめて、ただいまと言ってあげたか
6 った……幽」

7 二十年近く経った今も、娘のことを思い出さない日は一日たりとてなかった。

8 インターフォンが鳴れば娘が帰ってきたのではないか、と過敏に反応し、街で娘
9 と同年代の少女を見るたびに目で追ってしまふ。

10 もう楽になりたいと、自死が頭を過ったことも一度や二度ではない。だがその
11 度に、娘の悲しむ顔や怒った顔が思い浮かび、踏みとどまってきた。

12 いつも優しく、コロコロと表情が変わる子だった。なんにでも興味を持つくせ

13 にどこへ連れてって、何を買ってなどのワガママを殆ど口にしない、母親想いの

14 子だった。

15 「……ごめんね、幽……ごめんね……お母さんもう疲れちゃった。会いたい……
16 会いたい……許して……」

17 そんな娘を、香澄は愛していた。幽を失って数年は精神病棟で過ごす羽目にな
18 る程に、心が死を受け入れられなかった。

1 まともな精神状態でなかったせい、記憶に黒いモヤが掛かっているが……
2 娘が仲良くしていた男児へと心ない言葉を浴びせたこともある。

3 お前が死ねばよかったのに。

4 そんな恨み言を吐いた自分を、香澄は酷く嫌悪した。

5 娘が命を賭けてまで守りたいと望んだ少年。そんな彼を手には掛けようとまで
6 した自分を憎悪すらした。

7 彼に生きていてほしい。

8 多くを望まない娘が、最期に望んだ願いすらも否定しようとした自分が心底
9 憎かった。

10 だがどうすればよかったのだろう。あのまま笑って『あなたは悪くない。娘が
11 死んだのは定められた運命だったのよ』などとどの口がほざく？

12 いつも自分より他者を優先していた娘に死の順番が巡ってくるのが運命？

13 ふざけるな。そんなくだらない裁決を下す神ならいらぬ。死後必ず呪い殺して
14 やる。

15 ……などと瞳の奥に黒い炎を灯したところで、何にもならない。香澄はおもむ
16 ろに立ち上がると、

17 「……買い物、しないと」

18 幽鬼のような顔色でふらふらと歩きだす。

1 ショッピングバッグを持って、食料の買い出しに行こう。
2 そう思い、家の中へ踵を返そうとした時――
3 「……？」
4 誰かの視線を感じた。
5 だが周囲を見回しても、人影一つ見当たらない。
6 気のせいだったのだろうと思い直し、香澄は肩を竦めた。
7
8 ++ ++ ++
9
10 「あ、危なかった」
11 そう呟き塀に背中を預けてへたり込んだのは、年端も行かない少女。赤いラン
12 ドセルを背負った、黒い長髪が麗しい女の子。
13 彼女の名前はかすか。
14 目鼻立ちがくっきりしている美少女という以外は普通の女兒なのだが……一
15 つだけ普通から大きく逸脱した特徴がある。
16 それは、前世の記憶と死後の記憶をそのまま保持しているということ。
17 前世における彼女の名は、四十九日幽。今かすかがへたり込んでいる塀に守ら
18 れた家、そこに住む四十九日香澄は前世での彼女の母である。

1 「ふにゅ……やっぱり元気ないなあ、おかーさん。わっ、て飛び出していけたら
2 楽なのに」

3 生まれ変わって今は別の生を送っているとはいえ、自分を愛し育ててくれた
4 母を忘れられるはずがない。

5 かすかは小学校からの帰宅時や散歩の際、よく四十九日家の様子を伺ってい
6 る。

7 母はどうしているだろうか。病気はしていないか、幸せなのか。気になって仕
8 方がないのだ。

9 見た所、幽の死を引きずっており、ただ死神の迎えを待つだけの孤独な生を送
10 っているようだ。

11 覚えていてくれるのは、変わらず愛し続けてくれているのは嬉しい。だが、不
12 幸でいてほしくない。いてほしいはずがない。

13 だからと言って、母の元に帰る事はできない。かすかには今、新しい人生があ
14 り、新しい両親がいる。前世の母も今世の両親も、どちらもかすかにとって大事
15 な人なことに変わりはない。

16 そもそも死んだ娘が急に現れるという衝撃に、母の心は耐えられるのだろう
17 か。時間経過により曲がりなりにも受け入れつつある娘の死をまた思い出させ
18 るだけなのではないか。娘を騙る性質の悪いイタズラだと一蹴されてしまうか

1 もしれない。

2 どうすればいいのだろう。どうすれば母は元気になってくれるだろう。

3 「……おかーさんに、ただいまって言いたいな。でも今の私を見て、おかーさん

4 気づいてくれるかな？ というか気づかれていいのかな？ そもそも私って今

5 四十九日幽なのかな、見た目はそっくりだけど……うーん、うーん」

6 ああでもないこうでもないと思案しながら、かすかは歩き始める。今日も今日

7 とて、大好きな恋人と会う約束をしているのだ。

8 前世からの絆で結ばれた恋人と。

9

10 「ねえ、なっちゃんはどうすればいいと思う？ おねーちゃん、脳味噌がパンク

11 しそうで……お願い、知恵を貸して！」

12 彼氏の家に着くなり、かすかはそう切り出した。なっちゃんと言うのは、泣き

13 虫であることに由来した彼氏の愛称だ。名前とは全く関係がない。

14 「会うにしてもどの立場で会えばいいの？ 四十九日幽？ それともそっくり

15 さん？ 魂はおんなじだけど身体は別物だし、そもそも新しいかすかとしての

16 記憶もあるしで……うううーおねーちゃん自分が分からない！」

17 パニック状態のかすかに、『どちらにせよ今も昔もおねーちゃんは僕の大事な

18 人、大好きな彼女だよ』と伝える彼。

1 「大好きな彼女……えへへ♪ ありがと、なっちゃん。てことは前と変わら
2 ない、私って存在ってこと?」

3 そう訊くと、『そうだけど、違うような……』と歯切れの悪い返答が帰ってき
4 た。

5 「んー、よくわかんないから一旦いいや! それよりなっちゃん、おかーさんに
6 何をしてあげるべきかな? 会っていいのかな、ねえねえ! 難しくて分かん
7 ないよお……うう」

8 尋ねられた彼はしばらく思案したのち、自信なさげに口を開いた。

9 「手紙……?」

10 手紙を書いてみたらどうか、そんな提案。もつとも、これは母に読んでもらう
11 とかそんな目的で書くよう促したわけではない。

12 会うべきか、会わないべきか。何かアクションを起こすべきか、そつとしてお
13 くべきか。それら全てにおいて、かすかが迷っているように見えたためだ。

14 まず自分の中にある感情を整理するべき、そんな想い人からの提案に、かすか
15 は強く頷いた。

16 「……分かった、書いてみる!」

17 伝えたいことは、言葉に出来ないほどたくさんある。何せ前世からの想いだ。

18 一朝一夕で語りあかせるはずもあるまい。

1 かすかは夢中でペンを走らせた。

2 一日だけでは書ききれず、二週間以上掛けて思いの丈を手紙に込めた。

3 「できた！」

4 最終的には十枚を超える超大作となった。手紙というには順序だてておらず、
5 ただ思いの丈をそのまま書きなぐったような拙い文章の羅列。

6 しかしながらそれゆえに、希釈されていないダイレクトな感情が伝わって
7 るような、真心いっぱいの手紙。

8 「どう……かな？」

9 まずは想い人に読んでもらい、率直な感想を求める。正直なところかすかは、
10 手紙を書いた今でも自分の気持ちがいまいち分からない。相反する様々な想いが胸
11 中で渦巻き、結論へと辿り着かせてくれない。

12 ごくりと唾を呑み、彼の言葉を待つ。静寂が息苦しい。

13 ——はやく何か言ってお……おトイレ我慢する時みたいにむず痒い……。

14 そんなかすかの心境など知らないばかりに、彼は背中を向けた。

15 「え、なっちゃん、感想は？ 感想はないの？」

16 彼はあろうことか、そのまま一枚の紙を取り出し何かを書き殴り始めたのだ。

17 声を掛けても反応がない。

18 しゅしゅ諦めたかすかが待っていると、ようやく彼が振り向きその紙を見せ

1 てきた。

2 「……これって……」

3 そこには、『四十九日香澄様へ』と丁寧な文字で書き綴ってあった。そこに続
4 く内容は、幽が書いたと思しき手紙が見つかったのでお送りしますといったも
5 のだ。

6 「ちょ、見せる前提なの!? ええ、でも心の準備が……」

7 勝手に決めるなんて。せめて相談してから、そう抗議するかすかに、彼は優し
8 く微笑みかける。

9 「……見せたい、知ってほしいって気持ちだが、伝わってきた?」

10 彼の言い分を要約するところだ。

11 手紙の中には、自分の気持ちを知ってほしい、不幸じゃなかったと伝えて、母
12 に前を向いてほしい。そんな思いが込められているように感じた。

13 「でも、生まれ変わりなんておかしいし、お母さんショックで倒れちゃうんじゃない」

14 かすかの当然の疑問に対しても、彼は動じることなく答える。

15 生まれ変わりの事は伏せておけばいい。あくまで四十九日幽が生前書いた母
16 への手紙、ということにすればいい。

17 そんな彼の言葉に、かすかはしばし考え込む。

18 やがてよし、と顔を上げると、覚悟を決めたような顔をして、

1 「分かったよ、なっちゃん。じゃあこの手紙は……おかーさんに届ける。もちろんこっそり、バレないように！ よーしそうと決まれば早速行ってくるよー！」

3

4 こっそりポストに入れるだけ。母が不在の隙にサッと入れてシュバツと帰る。

5 それだけの簡単なお仕事。そう思っていたのに――

6 「……幽……!？」

7 「あ」

8 バツタリ。そんな擬音がぴったりの状況に陥ってしまった。

9 なんと買い物帰りの香澄とエンカウントしてしまったのだ。

10 前世と瓜二つなすかの顔を見て、母が何も思わぬはずがない。

11 ポストに入れようとしていた手紙をサッと後ろ手に隠して、かすかは『えと、

12 えと』としどろもどろになりながら声を発した。

13 「は、はじめまして！ 私、そのー……幽？ って子じゃありませんけど……？」

14 えーと、ユウ！ ユウです私は！ 幽ちゃんじゃありません！」

15 咄嗟の偽名は『幽』を音読みしただけというお粗末な物。しかも言い訳じみた

16 早口で繰り出してしまったため、怪しさが増している。

17 だがそんなことは聞こえていないのか、母はかすかの顔を見たまま固まって

18 いる。そうして喉を詰まらせたかのように何度かつかえながらも、

1 「あ、あの……よかったら、お菓子でも食べていかない？」

2 そう言っつかすかを招いてくれた。

3

4 「ただい……お、おじゃましまーす」

5 「はい、どうぞ」

6 「わあ……」

7 変わらない。タイムスリップでもしたかのように、久方ぶりの我が家は変わら
8 ない雰囲気がかすかを迎えてくれた。

9 懐かしさと言いやうのない安堵感に涙が零れそうなのを堪えていると、時間
10 が止まっている家の中に、唯一見覚えのない空間を見つけた。

11 ——私の、仏壇……。

12 幽の冥福を祈るための、煌びやかで豪華な仏壇。二十年近く経った今も、欠か
13 さず祈りを捧げてくれているのだろう。

14 まだ瑞々しいリンゴや、幽が好んで食べていたお菓子などが複数供えられて
15 いる。

16 「ああ……うちの娘、亡くなっちゃったのよ」

17 かすかが黙り込んだまま止まっていたため、気遣いからか母が声を掛けてく
18 れた。

1 「もう二十年以上前のことなんだけどね。こんなことを言うと嫌な気持ちにな
2 るかもしれないけれど……貴女によく似た子だったわ。ほんとそっくり」

3 「ほ、ほんとですね……ほんと、私にそっくり……」

4 笑顔でこちらにピースしている生前の四十九日幽の写真は、今のかすかから
5 しても鏡を見ている気分になるほどだ。

6 母が自分を幽だと気づかないだろうか、と心配になるほどに。

7 「お気になさらず、そこに座って。今お菓子用意するわね」

8 「あ、はい！ ありがとうございます」

9 今更出て行くのも不自然だと考え、かすかは母からの申し出を受け入れた。

10 かつて親子だった、しかし今世では初対面の二人がテーブルを挟んで向かい
11 合う。

12 バスケット一杯に詰められたクッキーやチョコレートをつまみながら、また
13 してもかすかは泣きそうになった。

14 ——おかーさん、お菓子なんて食べないのに。こんなにたくさん……私のため
15 に買い続けてたの？ 二十年も、ずっとずっと……。おかーさん、おかーさん……

16 …。

17 視界が霞む。ダメだ、泣いちゃいけない。こんなにも優しく愛情深い母に、こ
18 れ以上心配を掛けちゃいけない。

1 そうやって必死で涙腺と格闘していると、

2 「……っ、う、ぐすっ……あ、ああ……」

3 目の前から啜り泣きが聞こえてきた。かすかではなく、母が泣いている声だ。

4 「……ごめん、なさい。娘が帰ってきたみたいで、嬉しくて……急に泣いたりし

5 い、ごめんなさい……」

6 かすかと幽を重ねてしまったのだ。無理もない。四十九日幽から地続きの魂で

7 転生しているのだから。所作や表情、どれをとってもかすかと幽は似ているに決

8 まっている。亡くした娘を思い出し、涙する母を誰が責められようか。

9 涙をほろほろと落とす母を見て、かすかは内心自分の身勝手さを恥じた。

10 ——私が泣いてる場合じゃない。大事な人とまた会えて、夢まで叶って。幸せ

11 に生きてる私が、この人を差し置いて泣いていいはずがない。泣かせてるのは私

12 なんだし……だったら、私の手で……！

13 かすかはぐっと瞳の奥に力を込めると、香澄の傍へと寄り、背中を撫でさすっ

14 た。

15 「……ただいま、おかーさん」

16 「……え？」

17 自分の耳を疑ったのか、香澄は瞳を皿のようにして問う。

18 「……今、なんて……幽？ やっぱりあなた、幽なの？」

1 そう信じたいのだろう。死んだ娘が帰ってくるという荒唐無稽な筋書が、香澄
2 の中で出来上がっている。

3 だがかすかは、

4 「……違うよ。私は、幽ちゃんじゃない」

5 確固たる意志で否定した。

6 確かに自分は、四十九日幽の魂を持っている。記憶をそのまま持っている。で
7 もやはり、どうしようもなく別の『かすか』なのだ。

8 大好きな人の『お嫁さん』になることはできる。それは家や過去に囚われない、
9 二人の心の結びつきが形成する絆だから。

10 だけど目の前で泣く母の、『娘』になることはもうできない。

11 別の家に生まれた自分が彼女の『娘』になるには、今の家族を捨てる必要があ
12 る。自分を大事に育ててくれた新しい家族を泣かせたくない。一緒にいたい。自
13 分はもう、別の家の『娘』なのだ。

14 ——それに、おかーさんがお腹を痛めて生んでくれた幽は……もう私じゃな
15 いんだもん。おかーさんがくれた血も、身体も、全部私はなくしちゃった。私を
16 四十九日幽たらしめていた殆どの物は……あの日灰になって消えちゃった。当
17 たり前だけど、死んだ人はどうやったって生き返らないんだ。

18 血が繋がっていなければ家族にあらず、などと言うつもりはない。今だってか

1 すかと母の間には、絆の糸が結ばれていると信じている。確信している。

2 それでもやはり、今世で家族になることはできない。

3 母の心に空いた空白を埋められるのは、今のかすかじゃない。

4 「……私は、幽ちゃんじゃない。でも……変なことを言っている自覚はあるけど、
5 今だけ……私を娘だと思ってほしい。ううん、娘にしてほしいの。おかーさん」

6 「……っ」

7 あの日できなかったお別れを、やり直す。

8 母が幽の面影を追い、今も泣き濡れているのは知っていた。

9 自分もまた、ただいまともう一度言えなかったことを悔やんでいるから。

10 おかえりと言えなかった母の後悔が、嘆きが。我が事のように理解できる。

11 「帰ってきたよ、おかーさん。ただいま」

12 かすかはあの頃と変わらぬ、幽の時と変わらぬ咲き誇るような笑顔で、母にそ
13 う言った。

14 香澄は固まり、口元をわななかせている。娘の代わりなどいない、そう突っぱ
15 ねてやりたい憤りを抱いているのかもしれない。

16 それでも目の前にいる、娘にそっくりの『他人』を前にして、香澄は。

17 「……おか、えり……幽……幽……っ」

18 「うん。幽だよ、おかーさん。おかーさん……っ」

1 抱きしめる以外の選択肢を選べなかった。ずっと触れたかった。生まれた時からずっと守り、慈しんできた大切な娘にまた、おかえりと言ってあげたかった。

3 目の前のかすかが、娘ではないと頭では分かっている。それでも彼女の、オカルト的ではあるが『魂』とでも呼ぶべき部分が叫んでいる。

5 この子は娘だ。自分の愛してやまない娘なのだと、訴えかけている。

6 そのまましばらく、二人は抱き合っていた。

7 香澄は声を上げてわんわんと泣き、かすかの瞳からは静かに、一筋の雫が零れ
8 ていた――

9
10 それから一時間程が経ち、もう涙も枯れ果てたのだろうか。香澄は泣き腫らした赤い瞳を細め、幾分スッキリした表情で笑った。

12 「……ありがとう。あなたのおかげで、娘にまた会えた気がする。心が軽くなっ
13 た気がするの」

14 「それは……よかったです。私もお役に立てて嬉しいです」

15 母への愛情が溢れて崩れていた口調に、かすかは敬語の鎧を纏い直した。あく
16 まで自分は娘の幽ではない、そう伝える意図を込めて。

17 だがそんな小細工を弄さなくても、香澄の中ではもう結論は出ている。

18 「当たり前だけど、あなたは幽ではないのね。あの子は優しくて心配りができる

1 子だったけど……甘えん坊だった。私に付いて回って、抱っこをせがんだりハグ
2 をせがんだり……。あなたのように、私を甘やかすほど大人じゃなかったわ」

3 「……」

4 何も言えなかった。自覚はなかったが、死後学んだ様々な知識や、生まれ変わ
5 りのために努力し続けた日々。そして今世での新たな生と、愛する人と過ごす時
6 間が、自分を成長させてくれていたのかもしれない。

7 やはり自分はもう、あの頃の幽ではないのだ。

8 幽にはもう、戻れない。

9 「そうですね、私は幽ちゃんじゃない。幽ちゃんにはなれません」

10 チクリと胸が痛んだ。だがそれは悲しいことじゃないと言い聞かせ、かすかは
11 立ち上がった。

12 「あの……幽ちゃんに手を合わせてもいいですか？」

13 「ええ、もちろん。娘も喜ぶわ」

14 前世の自分の仏壇へ向かい、手を合わせる。

15 ——さよなら。さよなら前までの私。四十九日幽としての人生は、ここに置い
16 てく。おかーさんの傍に、置いてくね。

17 四十九日幽の時間はもう止まった。動き出すことはもう二度とない。母と手を
18 繋ぎ、家族の時間を過ごすことは二度とない。

1 ー——だけど、これからもよろしくね、私。幽だったころの人生も、記憶も思い
2 出も。全部持ったまま、私は新しい私の人生を送るから……行こうか。

3 結局自分は『幽』なのか『かすか』なのか、明確な答えは出ていない。

4 だけど自分は自分。あるがままの『私』であることに疑う余地はない。

5 「それじゃ、私はそろそろ行きますね」

6 「ええ」

7 結局、過去に囚われていたのはかすかも同じだったのかもしれない。彼氏であ
8 る『なっちゃん』や母同様、かすかも幽の死に囚われ止まっていたのだろう。

9 生まれ変わりたい。やり直したい。そんな願望に囚われ、幽としての人生が不
10 幸で締めくくられたかのように振る舞ってしまっていた。

11 「……ちょっと待って。最後に、聞かせてほしい。おばさんには、ずっと分から
12 ないことがあるの。あなたの意見を聞かせて。娘は……幽は、幸せだったと思
13 う？ それとも不幸な子だったと……思う？」

14 だけど今は。ここに置いていく『かつての自分』を思い返せば、答えは自ずと
15 変わってくる。

16 「……大好きなおかーさんに愛してもらって、精一杯生きて。たくさん楽しい
17 ことを経験して、美味しい物を食べて。笑って泣いて、時には怒って……恋もし
18 て。そんな人生……」

1 かすかは満面の笑みで、ピースサインを突き出した。

2 「幸せだったに決まってるじゃないですか！」

3 「……！」

4 四十九日幽としての人生は、人よりもずっと短かった。でも不幸なものでは決してなかったはずだ。

6 思い返しても、思い出はいつも優しい色で出迎えてくれる。

7 大好きな幼馴染や……母のおかげだ。

8 「それと、もう一つ。余計な言葉かもしれないけど……おかーさんにも、幸せになっ
9 ってほしい。いつかまた会う日に……楽しい思い出話に花を咲かせたいか
10 らー！」

11 「……！ 待って。あ、あなたは……やっぱり……」

12 「えへへ、悪い癖が出ちゃいました。自分自身のことみたいに話して、うっかり
13 してますね私」

14 てへ、と舌を出し、こちらへ伸ばされた香澄の手に背を向けて、かすかは駆け
15 出した。

16 「それじゃ、私はもう行きます！ 身体に気を付けて、元気に過ごしてください
17 ね！ さよな……」

18 「待って。最後におばさんのワガママ、もう一つだけ聞いてほしいの」

1 伏し目がちに切り出した母の願いは痛切で、酷くささやかな物だった。

2 「いつてらっしゃいと、言わせてくれない？」

3 「もちろん！」

4 断る理由などあるはずもない。かすかは二つ返事で応えて、息を吸い込むと。

5 「いつてきます！」

6 太陽よりも明るい声でそう言った。

7 そして母は、応じるように。あの日の続きのようでありながら、そうではない。

8 前に進むための一言を口にした。

9 「いつてらっしゃい……ありがとう」

10

11 ++++

12

13 「不思議な子だったわ」

14 娘に瓜二つの少女が帰った後、後片付けをしながら香澄がふと零す。

15 「幽に似ていて……でももっと大人びている、不思議な子」

16 正直な所、本当に娘なのではないかと何度も思った。喋り方も、仕草もまるで

17 生き写し。母から見てもあまりにそっくりだったのだから。

18 でも、違うのだ。

1 娘は死んだ。あの子は生きている。

2 それは決して交わることのない天と地のような隔たりなのだ。

3 「……あら？」

4 ふと、先ほど少女が座っていたあたりに一枚の便箋が落ちているのを見つけ
5 た。なんの気なしに拾い上げると、そこには。

6
7 四十九日香澄様へ

8
9 そう記されているではないか。

10 何故だろう、心臓が早鐘を打っている。香澄は急かされるように封を切り、中
11 から出てきた手紙を読み始めた。そしてすぐ、

12 「……。」

13 口元を抑えて後ずさった。

14 「い、これ……幽の字……？」

15 そこにある筆跡には見覚えがあった。何度も何度も繰り返し、この家に残され
16 た少女の文字を読み返してきたから。

17 自分が間違えるはずがない。

18 そして肝心の内容は、香澄に対する感謝の言葉が大半を占めていた。

1 どうしてこれが、こんな所に？

2 ポストでもなく、一体どうして。

3 「あ」

4 そんな時、香澄の頭に一つの可能性が思い浮かんだ。

5 あの少女。ユウと名乗った、幽に瓜二つの少女が置いていったのではないか？

6 やはりあの子は、幽なのか。

7 「……まさかね」

8 香澄は自分の荒唐無稽な発想に苦笑した。そんなはずがない。

9 触れて、喋って、そうして辿り着いた結論は、似ているけれど幽ではないとい

10 うこと。

11 あるいは、幽が事故に遭わずに生きていた場合そうになっていたであろう可能

12 性の一つとでも言えるだろうか。

13 どちらにせよ、事故は起こった。幽は死んだ。ならばあの子は幽ではないのだ。

14 ——それでも、あの子に救われた気がする。

15 ずっとずっと、心に黒いモヤが掛かっていた。だが今それは、晴れはしなが

16 薄くなっている。

17 雨上がりの曇り空のように、春先の雪のように。

18 娘のことは忘れない。香澄が死ぬまで、毎日想い続けることに変わりはないだ

1 ろう。

2 しかし、今までは止まっていた、香澄自身の時。

3 ようやく、その時計の針はゆっくりと。

4 だが確かに動き始める。

5 「どれどれ……」

6 手紙を読み始めてすぐ、香澄は口元に笑みを浮かべた。一番最初に書いている
7 文字が、あまりにも幽らしかったから。

8

9 『おかーさん、いつもありがとう。おかーさんの全部、ぜーんぶ大好き。大人風
10 に言えば、愛してる！ 愛してるよ、おかーさん！』

11

12 香澄は庭に出ると、空を見上げて呟いた。

13 「……私も愛してるわ、幽」